



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第30主日 A年(2023年10月29日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：出エジプト記 22章20－26節

第二朗読：テサロニケの信徒への手紙一 1章5c－10節

福音朗読：マタイによる福音書 22章34－40節

心を尽くして

三つの朗読から

第一朗読の「わたしは憐れみ深いからである」(26節)の一節をこころにとめましょう。弱い者、貧しい者、抑圧された者に目を注ぐのが神の憐れみなのです。

第二朗読の「聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れ」(6節)が印象深いです。み言葉を受け入れるとは、福音を受け入れることです。福音を受け入れるとは、イエスさまご自身を受け入れ、イエスさまとのパーソナルな関わり合いのなかに入れていただくことです。

福音朗読にある短いことば「愛しなさい」(37、39節)は、キリスト教信仰の本質を突く言葉となります。しかし、これは「～しなければならない」の掟ではありません。なぜなら愛を命じ、愛に生きられるのは、憐れみ深い神から愛されているという前提があるからです。ですから、この「愛しなさい」は生きることへの招きの言葉となります。

説教：「心を尽くして」

「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である」(マタ 22章37－38節)はイエスさまの答えですが『申命記』からの引用です。ユダヤ人は朝夕に二回、「シェマー」(聞け)という言葉で始まるこの箇所と、同じく『申命記』11章13－21節、そして『民数記』15章37－41節を信仰告白として唱えることが義務づけられていたそうです。そして、今でも厳格なユダヤ教徒はこれを守っています。

存在のすべてをかけて神を愛するとは、いったい何を意味するのでしょうか？ いくら朝な夕なにこの言葉を唱えたところで、生きている現実として愛が実践されるわけではないでしょう。愛は掟のように命じられるものでも、誰かから強制されるものでもないのです。その人のこころの内側からあふれ出てくるのが愛です。このような自発的な愛と愛の行いは、愛されたという経験から生まれます。最初に愛されて、その愛に応えるものとして人は誰かを愛していくのです。ですから、愛だけが愛を呼び起こすことができるのです。神から愛されたという体験を思い起こし、その愛のなかに生かされているのだという事実から、神を愛するという動機づけが生じるのです。

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして」(37節)とイエスさまはおっしゃいますから、この愛は何一つ残さず、ささげつくす愛であるはずです。わたしたちが神さまから愛されたのは、わたしたちが神さまからの愛を受けるにふさわしかったからではありません。無意味なもの、罪人を愛される神さまの無償の愛を受けたのです。ですから、その愛に応えるわたしたちの応答もまた、無条件でなければならないでしょう。

イエスさまは、天の御父から愛されていることをよく知っていました。「あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者」(マコ1章11節 フランシスコ会訳)という天の御父の言葉はイエスさまの心にいつも響いていたことでしょう。御父からの愛に精一杯応えようとした時に、イエスさまにとって十字架の道は当然のことだったのです。無償の愛に応える、無条件の愛の姿を十字架に見ないわけにはいきません。

イエスさまはこのように神への愛を説きながらも、さらに付け加えます。「第二も、これに似ている。『隣人をあなた自身のように愛しなさい。』」(マタ22章39節)。最初の掟と二番目の掟は切り離すことができません。なぜなら、神さまへの愛は隣人への愛の実践において具体的に示されますし、隣人への愛は神への愛に基礎をおくからです。隣人への愛を生まないような神への愛は、自己中心的な愛です。宗教的エゴイズムといってもよいでしょう。神を愛していると称して、真に神を愛しているのではなく、自分の宗教的な関心や宗教心を満足させているにすぎないのです。

隣人とは自分が選択するものではありません。その人にとって隣人となるのが、わたしたち一人ひとりに求められているのです。神を愛し、人を愛せる者となれますように。そのためには神から、隣人から無償で愛されてきたことを深く味わえますように。